

原因分析がすべて終了した出生年別統計

原因分析がすべて終了した 2016 年出生児の概況

2026 年 9 月 18 日時点

本集計の対象事例は、本制度の補償対象となった重度脳性麻痺事例のうち、原因分析がすべて終了した 2016 年出生の事例 363 件である。

再発防止委員会では、データの抽出元である原因分析報告書の情報により即したデータを体系的に整理・蓄積することを目的として、本制度の改定を実施した 2015 年以降出生の事例を対象に、脳性麻痺発症の原因に関するデータの抽出方法を変更した。これに伴い、「Ⅲ．脳性麻痺発症の原因」では、2015 年以降出生の事例について、集計表の書式を改訂した。

なお、表に記載している割合は、計算過程において四捨五入しているため、その合計が 100%にならない場合がある。

Ⅰ．分析対象事例における事例の内容

1. 妊産婦に関する基本情報

表 I-1 分娩時における妊産婦の年齢

対象数=363

	初産・経産の別			
	初産婦		経産婦	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
20 歳未満	2	0.9	0	0.0
20 歳～24 歳	28	12.9	7	4.8
25 歳～29 歳	57	26.3	24	16.4
30 歳～34 歳	77	35.5	54	37.0
35 歳～39 歳	44	20.3	51	34.9
40 歳～44 歳	9	4.1	10	6.8
45 歳以上	0	0.0	0	0.0

注)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I-2 妊産婦の身長

対象数=363

項目	件数	%
150cm 未満	14	3.9
150cm 以上～160cm 未満	197	54.3
160cm 以上～170cm 未満	136	37.5
170cm 以上	5	1.4
不明	11	3.0

表 I-3 非妊娠時における妊産婦の BMI

対象数=363

項目	件数	%
やせ 18.5 未満	67	18.5
正常 18.5 以上～25 未満	225	62.0
肥満Ⅰ度 25 以上～30 未満	31	8.5
肥満Ⅱ度 30 以上～35 未満	6	1.7
肥満Ⅲ度 35 以上～40 未満	2	0.6
肥満Ⅳ度 40 以上	1	0.3
不明	31	8.5

表 I-4 妊娠中の体重の増減

対象数^{注1)} =332

	非妊娠時の体格							
	やせ ^{注2)}		正常 ^{注2)}		肥満Ⅰ度 ^{注2)}		肥満Ⅱ度以上 ^{注2)}	
	(67)		(225)		(31)		(9)	
	件数	% ^{注3)}	件数	% ^{注3)}	件数	% ^{注3)}	件数	% ^{注3)}
±0kg 未満	1	1.5	2	0.9	2	6.5	3	33.3
±0kg～+7 kg 未満	19	28.4	52	23.1	13	41.9	5	55.6
+7 kg～+12 kg 未満	35	52.2	106	47.1	10	32.3	1	11.1
+12 kg～+20 kg 未満	11	16.4	59	26.2	6	19.4	0	0.0
+20 kg 以上	1	1.5	4	1.8	0	0.0	0	0.0
不明	0	0.0	2	0.9	0	0.0	0	0.0

注1) 「対象数」は、非妊娠時における BMI が不明の事例を含まない。

注2) 「やせ」は BMI18.5 未満、「正常」は BMI18.5 以上～25 未満、「肥満Ⅰ度」は BMI25 以上～30 未満、「肥満Ⅱ度以上」は BMI30 以上である。

注3) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I-5 妊娠中の飲酒および喫煙の有無

対象数=363

	飲酒・喫煙の別			
	飲酒		喫煙	
	(363)		(363)	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
あり	2	0.6	8	2.2
なし	306	84.3	334	92.0
不明	55	15.2	21	5.8

注) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -6 妊産婦の既往・現病歴の有無

対象数=363

項目		件数	%
既往・現病歴あり 疾患（重複あり）	女性生殖器系疾患	184	50.7
	呼吸器系疾患	54	(14.9)
	消化器系疾患	44	(12.1)
	精神疾患	25	(6.9)
	内分泌・代謝系疾患	13	(3.6)
	循環器系疾患	11	(3.0)
	腎・泌尿器系疾患	12	(3.3)
	神経系疾患	10	(2.8)
	その他の疾患 ^{注)}	1	(0.3)
既往・現病歴なし		83	(22.9)
不明		6	1.7

注 1) 「妊産婦の既往・現病歴」は、妊娠の診断時点ですでに診断されているものである。

注 2) 「その他の疾患」は、項目としてあげた疾患に該当しないものを集計しており、花粉症、腰椎椎間板ヘルニア、アトピー性皮膚炎、骨折等である。

表 I -7 初産婦・経産婦の別

対象数=363

項目	件数	%
初産婦	217	59.8
経産婦	146	40.2
既往分娩回数	1 回	95 (26.2)
	2 回	36 (9.9)
	3 回	8 (2.2)
	4 回	5 (1.4)
	5 回以上	1 (0.3)
	不明	0 (0.0)

表 I -8 経産婦における既往帝王切開術の回数

対象数=146

項目	件数	%
0 回	110	75.3
1 回	23	15.8
2 回	9	6.2
3 回以上	1	0.7
不明	3	2.1

2. 妊産経過

表 I -9 不妊治療の有無

対象数=363

項目		件数	%
不妊治療あり		53	14.6
治療内容	体外受精	31	(8.5)
	人工授精	6	(1.7)
	その他の治療 ^{注)}	16	(4.4)
	不明	0	(0.0)
不妊治療なし		304	83.7
不明		6	1.7

注)「その他の治療」は、排卵誘発剤使用等である。

表 I -10 単胎・多胎の別

対象数=363

項目		件数	%
単胎		336	92.6
双胎		27	7.4
膜性診断	二絨毛膜二羊膜双胎	5	(1.4)
	一絨毛膜二羊膜双胎	21	(5.8)
	一絨毛膜一羊膜双胎	1	(0.3)
	不明	0	(0.0)
三胎		0	0.0

表 I -11 胎盤位置

対象数=363

項目	件数	%
正常	339	93.4
前置胎盤	7	1.9
低置胎盤	3	0.8
不明	14	3.9

表 I -12 羊水量異常診断の有無

対象数=363

項目		件数	%
異常診断あり		59	16.3
診断内容	羊水過多	15	(4.1)
	羊水過少	12	(3.3)
	その他 ^{注)}	32	(8.8)
異常診断なし		273	75.2
不明		31	8.5

注)「その他」は、多い、少ないなどと記載されたものである。

表 I-13 妊娠・分娩・産褥期の診断^{注1)}の有無

対象数=363

項目	件数	%
診断あり	324	7.9
診断名 (重複あり)	切迫早産 ^{注2)}	173 (4.2)
	絨毛膜羊膜炎 ^{注3)}	84 (2.0)
	常位胎盤早期剥離	57 (1.4)
	切迫流産	45 (1.1)
	妊娠高血圧症候群	29 (0.7)
	臍帯炎 ^{注4)}	37 (0.9)
	子宮筋腫	21 (0.5)
	播種性血管内凝固症候群 (DIC)	15 (0.4)
	妊娠糖尿病	13 (0.3)
	回旋異常	9 (0.2)
	臍帯脱出	3 (0.1)
	卵巣腫瘍	13 (0.3)
	性感染症	13 (0.3)
	子宮破裂	4 (0.1)
	胎児母体間輸血症候群	4 (0.1)
	頸管無力症	8 (0.2)
	羊水塞栓	3 (0.1)
	児頭骨盤不均衡	3 (0.1)
	HELLP 症候群	2 (0.0)
	脳梗塞	0 (0.0)
	その他の診断名 ^{注5)}	178 (4.3)
診断なし	39	0.9
不明	0	0.0

注1) 「妊娠・分娩・産褥期の診断」は、妊娠の診断以降、分娩後12週までに診断されたものである。

注2) 「切迫早産」は、切迫早産と診断されていないが妊娠22週以降にリトドリン塩酸塩が処方された事例を含む。

注3) 「絨毛膜羊膜炎」は、胎盤病理組織学検査において絨毛膜羊膜炎と診断されたものである。

注4) 「臍帯炎」は、胎盤病理学組織学検査において臍帯炎と診断されたものである。

注5) 「その他診断名」は、項目としてあげた診断名以外を集計しており、静脈瘤や弛緩出血等である。

3. 分娩経過

表 I -14 分娩経過における母体搬送の有無

対象数=363

項目		件数	%
施設区分 搬送元	母体搬送あり	74	20.4
	病院	30	(8.3)
	診療所	43	(11.8)
	助産所	1	(0.3)
母体搬送なし		289	79.6

表 I -15 児娩出経路

対象数=363

項目	件数	%
経膈分娩	150	41.3
吸引娩出術・鉗子娩出術いずれも実施なし	110	(30.3)
吸引分娩	36	(9.9)
鉗子分娩	4	(1.1)
帝王切開術	213	58.7
予定帝王切開術	18	(5.0)
緊急帝王切開術	195	(53.7)

表 I -16 娩出経路別児娩出時の胎位

対象数=363

	娩出経路			
	経膈分娩 (150)		帝王切開術 (213)	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
頭位	147	98.0	168	78.9
骨盤位	2	1.3	36	16.9
横位	0	0.0	4	1.9
不明	1	0.7	5	2.3

注)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I-17 和痛・無痛分娩^{注)}の有無

対象数=363

項目	件数	%
あり	13	3.6
なし	350	96.4

注)「和痛・無痛分娩」は、硬膜外麻酔等を実施した事例である。

表 I-18 経膣分娩事例における初産・経産別分娩所要時間

対象数=150

	初産・経産の別			
	初産 (96)		経産 (54)	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
15 時間未満	73	76.0	51	94.4
15 時間以上～30 時間未満	17	17.7	3	5.6
30 時間以上	3	3.1	0	0.0
不明	3	3.1	0	0.0

注)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I-19 経膣分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第 1 期）

対象数=150

	初産・経産の別			
	初産 (96)		経産 (54)	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
15 時間未満	74	77.1	44	81.5
15 時間以上～30 時間未満	13	13.5	2	3.7
30 時間以上	2	2.1	0	0.0
不明	7	7.3	8	14.8

注)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -20 経膈分娩事例における初産・経産別分娩所要時間（分娩第 2 期）

対象数=150

	初産・経産の別			
	初産 (96)		経産 (54)	
	件数	% ^{注)}	件数	% ^{注)}
1 時間未満	52	54.2	42	77.8
1 時間以上～2 時間未満	22	22.9	3	5.6
2 時間以上	18	18.8	1	1.9
不明	4	4.2	8	14.8

注)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -21 初産・経産別破水から児娩出までの所要時間

対象数^{注1)} =211

	初産・経産の別			
	初産 (137)		経産 (74)	
	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}
24 時間未満	103	75.2	63	85.1
24 時間以上～48 時間未満	11	8.0	1	1.4
48 時間以上	10	7.3	5	6.8
不明	13	9.5	5	6.8

注1)「対象数」は、帝王切開時に破水した事例を含まない。

注2)「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -22 子宮破裂の有無

対象数=363

項目		件数	%
子宮破裂あり 注1)		4	1.1
既往の有無	子宮手術なし	2	(0.6)
	帝王切開術あり	2	(0.6)
	その他の子宮手術あり	0	(0.0)
	帝王切開術とその他の子宮手術あり	0	(0.0)
	不明	0	(0.0)
子宮破裂なし		359	98.9
不明注2)		0	0.0

注1)「子宮破裂あり」は、不全子宮破裂を含む。

注2)「不明」は、子宮破裂疑いのものを含む。

表 I -23 臍帯脱出の有無

対象数=363

項目		件数	%
臍帯脱出あり		3	0.8
関連因子 (重複あり)	経産婦	1	(0.3)
	子宮収縮薬 ^{注)} 投与	0	(0.0)
	人工破膜	0	(0.0)
	メトロイリーゼ法	0	(0.0)
	骨盤位	1	(0.3)
	横位	0	(0.0)
	羊水過多	0	(0.0)
臍帯脱出なし		358	98.6
不明		2	0.6

注) 「子宮収縮薬」は、オキシトシン、プロスタグランジン F_{2α}製剤、プロスタグランジン E₂製剤（経口剤）である。

表 I -24 分娩誘発・促進の処置^{注)}の有無

対象数=363

項目			件数	%
分娩誘発・促進あり			101	27.8
分娩誘発あり			34	9.4
処置 (重複あり)	薬の投与 子宮収縮	オキシトシン	26	(7.2)
		プロスタグランジン F _{2α} 製剤	5	(1.4)
		プロスタグランジン E ₂ 製剤 (経口剤)	6	(1.7)
	人工破膜		11	(3.0)
	メトロイリーゼ法		11	(3.0)
	吸湿性子宮頸管拡張器		6	(1.7)
分娩促進あり			67	18.5
処置 (重複あり)	薬の投与 子宮収縮	オキシトシン	35	(9.6)
		プロスタグランジン F _{2α} 製剤	0	(0.0)
		プロスタグランジン E ₂ 製剤 (経口剤)	3	(0.8)
	人工破膜		43	(11.8)
	メトロイリーゼ法		1	(0.3)
	吸湿性子宮頸管拡張器		0	(0.0)
分娩誘発・促進なし			262	72.2
不明			0	0.0

注) 「分娩誘発・促進の処置」は、子宮収縮薬の投与、人工破膜、メトロイリーゼ法、吸湿性子宮頸管拡張器の挿入である。

表 I -25 人工破膜実施の有無

対象数=363

項目		件数	%
実施あり		56	15.4
子宮口開大度 人工破膜実施時の 注)	0cm 以上～3cm 未満	1	(0.3)
	3cm 以上～7cm 未満	7	(1.9)
	7cm 以上～10cm 未満	8	(2.2)
	全開大	33	(9.1)
	不明	7	(1.9)
実施なし		306	84.3
不明		1	0.3

注) 「子宮口開大度」について、「〇cm～〇cm」などと記載されているものは、開大度が小さい方の値とした。

表 I -26 人工破膜あり事例における人工破膜実施時の胎児先進部の高さ^{注)}

対象数=56

項目	件数	%
～-3	3	5.4
-2	6	10.7
-1	4	7.1
±0	4	7.1
+1	2	3.6
+2	1	1.8
+3	0	0.0
+4～	5	8.9
不明	31	55.4

注) 「胎児先進部の高さ」について、「胎児先進部〇～〇」などと記載されているものは、先進部の位置が高い方の値とした。

表 I -27 急速遂娩^{注1)}の有無

対象数=363

項目		件数	%
急速遂娩あり		235	64.7
(重複あり) 適応	胎児機能不全	175	(48.2)
	分娩遷延・停止	16	(4.4)
	その他 ^{注2)}	69	(19.0)
	不明	4	(1.1)
急速遂娩なし		128	35.3
不明		0	0.0

注1) 「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術である。

注2) 「その他」は、胎盤異常、前置胎盤からの出血等である。

表 I -28 急速遂娩^{注1)}あり事例における急速遂娩決定^{注2)}から児娩出までの時間

対象数=235

	娩出方法 ^{注3)}					
	吸引分娩 (36)		鉗子分娩 (4)		帝王切開術 (195)	
	件数	% ^{注4)}	件数	% ^{注4)}	件数	% ^{注4)}
30分未満	11	30.6	2	50.0	42	21.5
30分以上～60分未満	0	0.0	0	0.0	38	19.5
60分以上	0	0.0	0	0.0	64	32.8
不明 ^{注5)}	25	69.4	2	50.0	51	26.2

注1)「急速遂娩」は、吸引分娩、鉗子分娩、緊急帝王切開術である。

注2)「急速遂娩決定」は、最初の急速遂娩決定時刻である。

注3)「娩出方法」は、最終娩出方法である。

注4)「%」は、各郡の分析対象事例に対する割合である。

注5)「不明」は、急速遂娩の決定時刻が不明の事例を集計した。

表 I -29 吸引娩出術実施の有無

対象数=363

項目	件数	%
実施あり	50	13.8
総牽引回数		
5回以内	37	(10.2)
6回以上	4	(1.1)
不明	9	(2.5)
実施なし	313	86.2
不明	0	0.0

表 I -30 鉗子娩出術実施の有無

対象数=363

項目	件数	%
実施あり	5	1.4
総牽引回数		
1回	2	(0.6)
2回以上	2	(0.6)
不明	1	(0.3)
実施なし	358	98.6
不明	0	0.0

表 I -31 緊急帝王切開術実施の有無

対象数=363

項目		件数	%
実施あり 児娩出までの時間 緊急帝王切開術 決定から	30分未満	45	(12.4)
	30分以上～60分未満	42	(11.6)
	60分以上	65	(17.9)
	不明 ^{注)}	43	(11.8)
実施なし		168	46.3

注)「不明」は、緊急帝王切開術の決定時刻が不明の事例を集計した。

表 I -32 子宮底圧迫法^{注)} 実施の有無

対象数=363

項目	件数	%
実施あり	47	12.9
実施なし	313	86.2
不明	3	0.8

注)「子宮底圧迫法」は、クリステレル胎児圧出法を含む。

表 I -33 分娩中の胎児心拍数聴取の有無

対象数=363

項目		件数	%
胎児心拍数聴取あり 聴取方法 胎児心拍数	ドップラのみ	17	(4.7)
	分娩監視装置のみ	136	(37.5)
	両方	203	(55.9)
	胎児心拍数聴取なし	7	1.9
不明		0	0.0

表 I -34 胎児心拍数聴取あり事例における胎児心拍数異常の有無

対象数=356

項目	件数	%
異常あり	314	88.2
異常なし	37	10.4
不明	5	1.4

表 I -35 臍帯巻絡の有無

対象数=363

項目		件数	%
臍帯巻絡あり		93	25.6
巻絡回数	1回	69	(19.0)
	2回	18	(5.0)
	3回以上	2	(0.6)
	不明	4	(1.1)
臍帯巻絡なし		247	68.0
不明		23	6.3

表 I -36 臍帯の長さ

対象数=363

項目	件数	%
25cm 未満	5	1.4
25cm 以上～40cm 未満	74	20.4
40cm 以上～55cm 未満	153	42.1
55cm 以上～70cm 未満	87	24.0
70cm 以上	26	7.2
不明	18	5.0

表 I -37 臍帯異常の有無

対象数=363

項目		件数	%
異常あり		75	1.8
(重複あり) 所見	辺縁付着	29	(0.7)
	卵膜付着 (前置血管を含む)	4	(0.1)
	捻転の異常	10	(0.2)
	単一臍帯動脈	0	(0.0)
	真結節	1	(0.0)
	その他 ^{注)}	43	(1.0)
異常なし		177	4.3
不明		111	2.7

注)「その他」は、細い、黄染等である。

4. 新生児期の経過

表 I -38 新生児の性別

対象数=363

項目	件数	%
男児	219	60.3
女児	144	39.7

表 I -39 在胎週数

対象数=363

項目	件数	%
満 28 週	15	4.1
満 29 週	10	2.8
満 30 週	11	3.0
満 31 週	18	5.0
満 32 週	19	5.2
満 33 週	22	6.1
満 34 週	14	3.9
満 35 週	19	5.2
満 36 週	20	5.5
満 37 週	37	10.2
満 38 週	44	12.1
満 39 週	55	15.2
満 40 週	58	16.0
満 41 週	21	5.8
満 42 週	0	0.0
不明 ^{注)}	0	0.0

注)「不明」は、原因分析報告書に「在胎週数が不明」と記載されているが、審査委員会において、妊娠・分娩経過等から補償対象基準を満たす週数であると判断された事例である。

表 I -40 出生体重

対象数=363

項目	件数	%
1,000g 未満	6	1.7
1,000g 以上～1,500g 未満	37	10.2
1,500g 以上～2,000g 未満	53	14.6
2,000g 以上～2,500g 未満	74	20.4
2,500g 以上～3,000g 未満	88	24.2
3,000g 以上～3,500g 未満	81	22.3
3,500g 以上～4,000g 未満	19	5.2
4,000g 以上	2	0.6
不明 ^{注)}	3	0.8

注) 「不明」は、蘇生処置等を優先したため、出生当日に体重を計測できなかった事例である。

表 I -41 出生時の発育状態^{注1)}

対象数=363

	在胎週数									
	28～32 週		33～36 週		37～41 週		42 週～		不明	
	(73)		(75)		(215)		(0)		(0)	
	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}
Light for dates (LFD)	11	15.1	11	14.7	27	12.6	0	0.0	0	0.0
Appropriate for dates (AFD)	57	78.1	61	81.3	164	76.3	0	0.0	0	0.0
Heavy for dates (HFD)	5	6.8	3	4.0	21	9.8	0	0.0	0	0.0
不明 ^{注3)}	0	0.0	0	0.0	3	1.4	0	0.0	0	0.0

注1) 「出生時の発育状態」は、「在胎週数別出生時体重基準値 (2010 年)」に基づいている。

注2) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

注3) 「不明」は、在胎週数や出生体重が不明の事例および「在胎期間別出生時体格標準値 (2010 年)」の判定対象外である妊娠 42 週以降に出生した事例である。

表 I -42 アプガースコア^{注1)}

対象数=363

	生後経過時間			
	1 分		5 分	
	(363)		(363)	
	件数	% ^{注2)}	件数	% ^{注2)}
0～3 点	198	54.5	117	32.2
4～6 点	41	11.3	79	21.8
7～10 点	121	33.3	160	44.1
不明	3	0.8	7	1.9

注1) 「アプガースコア」について、「〇点～〇点」などと記載されているものは、点数が低い方の値とした。

注2) 「%」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

表 I -43 臍帯動脈血ガス分析実施の有無

対象数=363

項目		件数	%
実施あり		300	82.6
臍帯動脈血ガス分析値 pH	pH6.7 未満	39	(10.7)
	pH6.7 以上～6.8 未満	28	(7.7)
	pH6.8 以上～6.9 未満	15	(4.1)
	pH6.9 以上～7.0 未満	17	(4.7)
	pH7.0 以上～7.1 未満	15	(4.1)
	pH7.1 以上～7.2 未満	23	(6.3)
	pH7.2 以上	154	(42.4)
	疑義 ^{注1)}	4	(1.1)
	不明	5	(1.4)
実施なし		36	9.9
不明 ^{注2)}		27	7.4

注1)「疑義」は、検査エラーとされたものである。

注2)「不明」は、採取時期が不明なもの、臍帯動脈血か臍帯静脈血かが不明なものを含む。

表 I -44 新生児蘇生処置^{注1、注2)} 実施の有無

対象数=363

項目		件数	%
実施あり		263	72.5
(重複あり) 新生児処置 実施した	人工呼吸 ^{注3)}	253	(69.7)
	気管挿管	199	(54.8)
	胸骨圧迫	103	(28.4)
	アドレナリン投与	55	(15.2)
実施なし		100	27.5

注1)「新生児蘇生処置」は、人工呼吸、気管挿管、胸骨圧迫、アドレナリン投与である。

注2)「新生児蘇生処置」は、第7回再発防止に関する報告書以降の分析対象事例では、生後28日未満に実施した蘇生処置を集計した。

注3)「人工呼吸」は、バッグ・マスク、チューブ・バッグ、マウス・ツー・マウス等である。

表 I -45 NICU または小児科入院^{注1)}の有無対象数^{注2)} = 363

項目	件数	%
NICU または小児科入院あり	334	10.0
新生児搬送 ^{注3)} あり	148	(4.5)
新生児搬送なし	186	(5.6)
NICU または小児科入院なし	29	0.9

注1) 「NICU または小児科入院」は、生後 28 日未満における当該医療機関またはほかの医療機関への入院を集計した。

注2) 「対象数」は、データの蓄積を開始した 2016 年以降に原因分析報告書を児・保護者および分娩機関に送付した事例である。

注3) 「新生児搬送」は、生後 28 日未満におけるほかの医療機関への搬送を集計した。

表 I -46 新生児期の診断^{注1、注2)}（頭部以外）の有無

対象数=363

項目	件数	%
診断あり	247	6.0
循環器系疾患	116	(2.8)
動脈管開存症 ^{注3)}	99	(2.4)
その他の循環器系疾患	50	(1.2)
呼吸窮迫症候群	69	(1.7)
播種性血管内凝固症候群 (DIC)	37	(0.9)
低血糖	40	(1.0)
新生児遷延性肺高血圧症	28	(0.7)
新生児貧血	39	(0.9)
新生児一過性多呼吸	24	(0.6)
胎便吸引症候群	18	(0.4)
高カリウム血症	18	(0.4)
B 群溶血性連鎖球菌 (GBS) 感染症	8	(0.2)
低二酸化炭素血症	1	(0.0)
その他の診断名 ^{注4)}	126	(3.1)
診断なし	116	2.8

注1) 「新生児期の診断」は、原因分析報告書に記載されている生後 28 日未満の診断であり、原因分析委員会で判断されたものを含む。

注2) 「新生児期の診断」のうち頭部のものは、「表Ⅲ-1 原因分析報告書に記載された脳性麻痺発症の原因」において頭部画像所見を集計しているため、集計対象外とした。

注3) 「動脈管開存症」は、症候性でないものを含む可能性がある。

注4) 「その他の診断名」は、項目としてあげた診断名以外を集計しており、高ビリルビン血症や気胸等である。

Ⅱ．分析対象事例における分娩の状況

表Ⅱ-1 曜日別件数

対象数=363

項目	件数	%
月曜日	54	14.9
火曜日	59	16.3
水曜日	56	15.4
木曜日	60	16.5
金曜日	53	14.6
土曜日	42	11.6
日曜日	39	10.7

表Ⅱ-2 出生時間帯別件数

対象数=363

項目	件数	%
0 時～7 時台	88	24.2
8 時～15 時台	145	39.9
16 時～23 時台	130	35.8

表Ⅱ-3 施設区分別件数

対象数=363

項目	件数	%
病院	278	76.6
診療所	83	22.9
助産所	2	0.6

表Ⅱ-4 都道府県^{注)}別件数

対象数=363

項目	件数	項目	件数	項目	件数
北海道	14	石川	2	岡山	8
青森	2	福井	2	広島	11
岩手	5	山梨	5	山口	3
宮城	9	長野	5	徳島	2
秋田	2	岐阜	7	香川	1
山形	6	静岡	18	愛媛	3
福島	6	愛知	22	高知	3
茨城	12	三重	3	福岡	13
栃木	9	滋賀	8	佐賀	1
群馬	6	京都	9	長崎	3
埼玉	16	大阪	15	熊本	1
千葉	11	兵庫	20	大分	1
東京	35	奈良	7	宮崎	6
神奈川	18	和歌山	3	鹿児島	6
新潟	5	鳥取	3	沖縄	10
富山	3	島根	3		

注)「都道府県」は、当該分娩機関所在地を指す。

Ⅲ. 脳性麻痺発症の原因

表Ⅲ-1 では、データを蓄積している 2015 年以降出生の事例を集計対象とし、原因分析報告書に記載された脳性麻痺発症の原因について集計した。「頭部画像所見の分類」は、原因分析報告書の脳性麻痺発症の原因に記載された頭部画像所見を再発防止委員会において 8 分類とし、1 事例につき 1 分類のみを集計した。一方、「産科的事象」は、原因分析報告書の脳性麻痺発症の原因に記載されたすべての産科的事象を集計しており、1 事例につき複数の産科的事象を集計している場合がある。なお、産科的事象は、脳性麻痺発症の原因としての関与のレベルにかかわらず集計した*。
*原因分析報告書の脳性麻痺発症の原因において、「～であると考える」、「～の可能性が高い」、「～の可能性はある」、「～の可能性を否定できない」、「解明することが極めて困難な事例であるが、～の可能性はある」、「解明することが極めて困難な事例であるが、～の可能性を否定できない」と記載されているすべての産科的事象を集計した。なお、背景因子や関連因子および増悪因子は含まない。

表Ⅲ-1 原因分析報告書に記載された脳性麻痺発症の原因^{注1、注2)}

対象数＝363

			頭部画像所見の分類 ^{注3、注4、注5)} （重複なし）															合計		
			低酸素性虚血性脳症 (193)		脳室周囲白質軟化症 (78)		脳室内出血 (8)		頭蓋内出血 (10)		白質障害 (5)		脳梗塞 (14)		その他 (35)		所見なし ^{注7)} (20)			
			件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	% ^{注7)}	件数	%
産科的事象 ^{注8)} の記載あり			192	99.5	70	89.7	5	62.5	5	50.0	1	20.0	0	0.0	13	37.1	1	5.0	287	79.1
産科的 事象 （重複あり）	母体 因子	子宮破裂	4	(2.1)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(1.1)
		母体の呼吸・循環不全	6	(3.1)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	6	(1.7)
		うち羊水塞栓症	3	(1.6)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(0.8)
		子宮頻収縮・過強陣痛	14	(7.3)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	14	(3.9)
		その他の母体因子 ^{注9)}	8	(4.1)	3	(3.8)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	11	(3.0)
	胎盤・ 臍帯 因子	常位胎盤早期剥離	52	(26.9)	8	(10.3)	2	(25.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	62	(17.1)
		臍帯血流障害（臍帯脱出以外）	102	(52.8)	47	(60.3)	1	(12.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(8.6)	0	(0.0)	153	(42.1)
		臍帯脱出	3	(1.6)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	3	(0.8)
		胎盤機能不全または胎盤機能低下	16	(8.3)	5	(6.4)	0	(0.0)	1	(10.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	22	(6.1)
		胎児母体間輸血症候群	4	(2.1)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	4	(1.1)
		その他の胎盤・臍帯因子 ^{注10)}	5	(2.6)	18	(23.1)	1	(12.5)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(2.9)	0	(0.0)	25	(6.9)
	胎児・新生児因子 ^{注11)}		15	(7.8)	9	(11.5)	3	(37.5)	3	(30.0)	1	(20.0)	0	(0.0)	11	(31.4)	1	(5.0)	43	(11.8)
その他 ^{注12)}		9	(4.7)	0	(0.0)	0	(0.0)	1	(10.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	0	(0.0)	10	(2.8)	
産科的事象の記載なし ^{注13)}			1	0.5	8	10.3	3	37.5	5	50.0	4	80.0	14	100.0	22	62.9	19	95.0	76	20.9

注 1) 「原因分析報告書に記載された脳性麻痺発症の原因」は、原因分析報告書の脳性麻痺発症の原因の概要である「主文」とその根拠である「根拠」から構成されており、原則として「主文」に記載された頭部画像所見と産科的事象を集計した。ただし、頭部画像所見は、「主文」に記載がない場合「根拠」に記載されたものを分類し集計しており、脳性麻痺発症の原因と明記されていないものを含む。

注 2) 「原因分析報告書に記載された脳性麻痺発症の原因」のうち産科的事象は、脳性麻痺発症の原因としての関与のレベルにかかわらず集計した。脳性麻痺発症の原因としての関与のレベルの詳細は注 8) に記載している。

注 3) 「頭部画像所見の分類」は、頭部 MRI・頭部 CT の頭部画像データにおいて認められた所見をもとに集計した。「頭部画像所見の分類」は、再発防止委員会において分類しており、分類の詳細は図Ⅲ-1 にて示している。

注 4) 「頭部画像所見の分類」について、原因分析報告書に複数の頭部画像所見が記載されている場合は、再発防止委員会において整理した分類に基づき、1 分類のみを集計した。分類の詳細は図Ⅲ-1 にて示している。

注 5) 「頭部画像所見の分類」は、集計対象の全事例におけるデータを集計しているが、事例により症状の発現時期が異なるため、撮影時期は出生後早期とは限らない。

注 6) 頭部画像所見の分類の「所見なし」は、原因分析報告書に重度の運動障害に関連すると考えられる頭部画像所見が記載されていない事例である。

注 7) 「％」は、各群の分析対象事例に対する割合である。

注 8) 「産科的事象」は、原因分析報告書の脳性麻痺発症の原因において、「～であると考える」、「～の可能性が高い」、「～の可能性はある」、「～の可能性を否定できない」、「解明することが極めて困難な事例であるが、～の可能性はある」、「解明することが極めて困難な事例であるが、～の可能性を否定できない」と記載されているすべての産科的事象を、脳性麻痺発症の原因としての関与のレベルにかかわらず集計した。なお、背景因子や関連因子および増悪因子は含まない。

注 9) 産科的事象の「その他の母体因子」は、子癇等である。

注 10) 産科的事象の「その他の胎盤・臍帯因子」は、前置胎盤・低置胎盤の剥離、双胎における血流の不均衡等である。

注 11) 産科的事象の「胎児・新生児因子」は、髄膜炎・敗血症・敗血症性ショック、新生児呼吸停止等である。

注 12) 産科的事象の「その他」は、吸引・鉗子分娩、交通事故等である。

注 13) 「産科的事象の記載なし」は、原因分析報告書に脳性麻痺発症の原因に関与したと考えられる産科的事象が記載されていない事例である。

図Ⅲ-1 再発防止委員会において分類した頭部画像所見の分類^{注1、注2)}

頭部画像所見の分類							
低酸素性虚血性脳症	脳室周囲白質軟化症	脳室内出血 ^{注3)}	頭蓋内出血	白質障害	脳梗塞	その他	所見なし
・低酸素性虚血性脳症 ・多嚢泡性脳軟化症 ・低酸素・虚血の所見 ・大脳基底核・視床の信号異常	・脳室周囲白質軟化症 ・多嚢泡性脳室周囲白質軟化症	・脳室内出血	・頭蓋内出血 ・硬膜下血腫 ・くも膜下出血 ・出血後水頭症 ・小脳出血 ・上衣下出血 ・その他出血	・白質容量の低下 ・大脳白質の信号異常 ・白質障害	・脳梗塞	左記以外：ビリルビン脳症、脳炎、孔脳症等	重度の運動障害に関連すると思われる所見なし
原因分析報告書に記載された頭部画像所見							

注1)「頭部画像所見の分類」は、再発防止委員会において重度運動障害への関連が強いと整理したものをより左方に位置付けている。

注2)「頭部画像所見の分類」について、頭部画像所見が複数記載されており所見が複数の分類に該当する事例は、本図の分類のより左方に位置する分類のみを集計することと再発防止委員会において整理した。

注3)「脳室内出血」は、重度の運動障害に関連すると考えられる重度の脳室内出血であり、軽度の脳室内出血は含まない。